

吳秀三先生没後滿五〇年記念行事

本学会の初代理事長である吳秀三先生は一九三二年（昭和七年）三月二六日、シーボルト伝ドイツ語訳の最中に、尿毒症をもってなくなられた。入院中の譫妄状態のなかでも、ものをかく動作をくりかえし、意識が清明化したときは、シーボルト伝につきあれこれ配慮していたとつたえられる。享年六七歳。先生の遺業をしのび、それを今日にうけつぐべく発足した吳秀三先生没後滿五〇年記念会（小川鼎三会長）は、本学会の協賛をえて、祥月御命日から一日おくれであるが、本年三月二七日（土）にその記念行事をおこなった。

午前中は多摩霊園にある先生の墓所で墓前祭をとりおこなった。心配された天気もよくて、風はなく、桜がさきはじめていた。準備委員の長谷川源助が司会して、まず広島県医師会から同副会長長野間祐輔氏が、呉市医師会から同常任理事で吳先生の縁つづきの豊田秀三氏が献花。お供物は、先生の御長男故茂一氏嗣子忠士氏代理の今村正義氏（忠士氏はブラジル出張中）が大福餅を、先生の四女の三浦芳江さんが落花生をそなえた。ともに若年および晩年に先生のこのまれたものである。つづいて、矢數道明氏、江川義雄氏、櫻井圖南男氏がそれぞれ、日本医史学会、広島県医師会、精神科医を代表して挨拶・式辞・墓前にささげることばをのべた。一同焼香ののち、遺族代表で先生の二男の吳章二氏の謝辞があった。一同はついで、先生の外祖父柴川箕作阮甫先生をまつる箕作家墓地にうつって、阮甫先生の孫麟祥の曾孫にあたる医師箕作禎子さんおよび吳先生の孫で先日なくなった元日本医科大学学長木村榮一氏の夫人公さんが献花。一同焼香。さらに先生の甥にあたる吳建先生の墓地にうつった。ここには、先生の祖父山田黄石先生、父君吳黄石先生、母堂せき様（箕作阮甫一女）、令兄吳文聰先生（建先生父君）もまつられている。建先生の御長男吳守一氏の献花および、この墓所の由来についての説明があった。つづいて一同焼香。

午後は、順天堂大学有山登記念館で、シンポジウム「吳秀三先生のこしたもの」がおこなわれた。準備委員の大塚恭

男および岡田靖雄が司会。岡田「呉秀三先生の生涯と業績」、吉岡真二「私宅監置調査の現代的意義」について、丸山博氏が呉先生および森鷗外の統計研究について発言した。箭内健次氏の「シーボルト研究史における呉先生の位置づけ」について、宗田一氏が華岡青洲研究その後につき、大久保利謙氏が洋学史研究における呉先生につき発言。最後は緒方富雄氏が「晩年の呉先生と私」をはなされた。なにぶんにも膨大な呉先生の遺業を概観だけするにも時間がたりなすぎ一般討論の時間もなかったが、緒方報告をもって、あとは夕食会での思い出話しにうつることにした。

シンポジウムと平行して、順天堂大学九号館第二会議室では、医学文化館および恩文閣出版の後援をえた記念展覧会が午前中からひらかれていた。

記念夕食会は、有山登記念館でおこなわれた。準備委員の吉岡真二・酒井シヅが司会。まず呉章二氏より列席の御遺族・御親戚が紹介された。岩生成一氏が歴史研究者としての先生につき、青木義作氏が精神病学者としての先生につきかたられたのち、小川会長の挨拶と乾盃とがあった。つづいて、齋藤茂太しげた氏が先生と父君茂吉とのことにつき、富士川英郎氏が呉先生御一家と富士川游先生はじめご自分との交際につき、野間祐輔氏が呉茂一先生をとおしてみた呉秀三先生につき、はなされた。最後に呉章二氏が父君の思い出をかたられた。あと一同歓談のち散会した。

じつは、呉家はこのところ御不幸つづきで、昨年末に呉文炳ふみわき氏（秀三先生甥）、本年にはいり木村榮一が氏がなくなり、さらに本年三月二日に先生の一女である三浦タマさんがなくなられた。三月二七日は、三浦タマさんの初七日にあたっていたが、三浦芳江さん、呉章二氏はじめ大勢の御遺族が記念行事に御出席くださった。また、御親戚の呉守一氏、豊田秀三氏、豊田摩訶慧氏、箕作禎子さん、安藝基雄氏などが御出席くださった。記してお礼をもうしあげる。

記念会の総まとめになる記念会誌は、本号にのっているシンポジウム記録を中心に当日の全記録をまとめて、ひきつづき発行する予定である。その編集も、本誌編集委員会の協力をえて終了した。最後に、この記念行事が無事終了したのは、本学会会員諸氏の御協力によるものと、心からお礼をもうしあげたい。

（岡田靖雄記）